

希望発表形式：ポスター

ARCUSdigma II を用いた咬合採得による臼歯部補綴治療の症例

○冨澤 倫, 中村健太郎*, 大津智宏, 山本司将*, 高梨和弘**, 細川稔晃**,
H. W. Lang **

東京支部, *東海支部, **カボデンタルシステムズジャパン (株)

A Case Report of Molar Prosthetic treatment Taken Bite Registration Using ARCUSdigmaII

Tomizawa H, Nakamura K*, Otsu T, Yamamoto M*, Takanashi T**, Hosokawa T**,
Lang H.W. **

Tokyo Branch, *Tokai Branch, **KaVo Dental Systems Japan Co., Ltd.

I. 目的

補綴治療の目的は咀嚼の回復であり, 完遂するには咀嚼終末位での咬頭嵌合位の構築¹⁾と第一小臼歯から第二大臼歯までの各歯における咀嚼機能を果たす咬合面形態の付与が不可欠である。

それ故に, 無調整による口腔内への装着が課題であり, 結論として精度の高い補綴装置の作製が要求される。

しかし, これまでの補綴臨床では, 咬合面形態を変化させる咬合調整に反映する咬合採得の信頼性が乏しく, その再現性に疑問を抱くことも少なくない。これは, 咬合採得材の挿入後における咬頭嵌合位が, 挿入前における咬頭嵌合位と同咬合位であるか, または咬合採得材の硬化時間内における咬頭嵌合位の保持ができていないかが不確定であったことにある²⁾。

そこで, 補綴装置装着時における咬合調整を回避することを目的に, デジタル式顎運動計測装置 ARCUSdigma II (KaVo社製) を用いた咬合採得の臨床応用を試みた。

ARCUSdigma II はコンピュータ視覚情報を利用した咬合採得モジュールAdduction Fieldを備えており, この機構により咬頭嵌合位をモニター上にて術者と患者の両者が視認しながら咬合採得材による記録が可能である。

今回は, このAdduction Fieldを用いた咬合採得による臼歯部補綴治療を施した症例について報告する。

II. 方法

症例1: 患者は初診時57歳, 女性である。主訴は上顎右側第二小臼歯の腫脹および咀嚼時痛である。補綴装置は ⑥5④ ブリッジと ⑥ クラウンとした。

症例2: 患者は初診時74歳, 男性である。主訴は下顎左側第二大臼歯の冷痛である。補綴装置は ⑤6⑦ ブリッジとした。

症例1, 2ともプロビジョナルレストレーションおよびファイナルレストレーションにおける咬合採得において, 術者が誘導しない咀嚼終末位と一

致する習慣性閉口終末位をターゲットエリアと設定し, 咬合採得前に術者と患者でそのエリアを視認した。

咬合採得法は咬合印記法とし, 咬合採得材にはマッシュプリント (デンツプライ三金社製) を用いた。口腔内保持時間 (2分) 中は, 術者と患者でその保持するエリアを視認し続けた。

トリミングしたマッシュプリントを患側に当てて咬合接触部位を印記し, その位置で上下顎模型を固定した。固定には自作のクランプを用い, 可及的に固定する力を均等にした。咬合器はプロターevo7 (KaVo社製) を用い, ハイマウント (サンエス石膏社製) による咬合器装着では使用する石膏を可及的に少量とした。

咬頭嵌合位での補綴装置および残存歯部の咬合接触状態の観察には, バイトチェッカー (ジーシー社製) によるシリコーンブラック法を用いた。

III. 結果と考察

ARCUSdigma II を用いた咬合採得による臼歯部補綴治療の結果,

- 1) 症例1, 2とも, 咬合調整を必要としなかった。
- 2) 症例1, 2とも, 咬合器上での咬合接触状態と口腔内での咬合接触状態の合致が観察できた。

以上のことから, コンピュータ視覚情報を利用した咬合採得を用いることで, 咬合調整を必要とせずに口腔内への装着が可能であった。

IV. 文献

- 1) 中村健太郎, 林徳俊, 山本司将, 近藤康史, 森山毅. 咀嚼機能障害者における咀嚼終末位の検討. 日補綴会誌 2011; 4・121回特別号: 123.
- 2) 山本司将, 中村健太郎, 林徳俊, 近藤康史, 高梨和弘, 細川稔晃ほか. コンピュータ視覚情報を利用した咬合採得の評価ーARCUSdigma II を用いてー. 補綴誌 2012; 4・121回特別号: 125.